



特集
ゆらぐ境界
～その先に見える世界～

MESSAGE

県境マニアが語る境界の魅力

県境というと、ただの行政上の区分にすぎない、もしくは旅の途中で通り過ぎるだけの、なんでもない通過点と思うかもしれません。しかし私にとって県境は、昔から自分の心を躍らせるエンターテインメント空間でした。左足が〇〇県、右足が△△県という異なる行政区分に立つことに、なぜか興奮します。

一時期は、県境をまたがないと居ても立ってもいられないほどでした。気付いたら、北は東北から南は九州まで、日本全国のあらゆる県境をまたぎました。時には食費を切り詰め、車中泊をしてまで、県境をまたぐ快楽を追い求めました。

特に山奥や河川など^{へんぴ}な場所にある県境は、1人では野生動物に遭遇しそうな緊張感を覚えることが多いです。ただ、私にはその緊張感がたまりません。私が県境に魅せられたきっかけも、県境の青看板に近い場所で2匹の子熊に遭遇して恐怖を覚えたことでした（車中の目の前を横切っただけなので無事でした）。

県境は秘境であることも多く、自然が魅せる絶景に出

会えることがあります。標高2,000mを超える浜峠ホテルは真ん中を県境が通っており、建物に大きく「ぐんま」[ながの]と描かれています。私が勝手に「東の横綱」と呼んでいる県境の名所ですが、近くの日本国道最高地点から見える日の出は絶景そのものです。

一方で「西の横綱」は、京都府と奈良県の府県境にあるイオンモール高の原。日本で唯一県境をまたぐイオンモールで、建物の中や駐車場には県境の境界線が描かれています。警察の管轄や納税先、上下水道の契約先、ごみ処理の方法が変わる行政上の境界線を実感する県境スポットです。

高野山と龍神温泉を結ぶ高野龍神スカイラインは、県境の尾根に沿っており、車で走行すると短距離で何十回と県境をまたぎます。カーナビでは、「和歌山県に入りました」「奈良県に入りました」というアナウンスが面白いくらい何度も繰り返されます。

高野龍神スカイラインのような、尾根沿いの県境は珍しくありません。そして、尾根沿いは河川の水の流れが

変わる分水嶺であることも多いです。特に私が興味を惹かれるのは、水の流れが日本海・東シナ海側と太平洋・瀬戸内海側で分かれる中央分水嶺です。

中央分水嶺の名所は日本各地にありますが、私が印象的だったのは山形県と宮城県との県境まで約500mの距離にある、JR陸羽東線堺田駅です。堺田駅のすぐ目の前には、一見なんの変哲もない小さな用水路のような小川がありますが、それが日本海と太平洋を分ける中央分水嶺になっています。小川に笹舟を流し、東へ流れれば太平洋へ、西へ流れれば日本海へ向かっていくことを想像すると、ドラマチックな光景に思えてきます。

ユニークな境界線は、県境や中央分水嶺だけではなくありません。例えば、東日本と西日本の電源周波数を分ける50Hzと60Hzの境界線があります。その1つが、富山県や長野県に隣接する新潟県糸魚川市周辺です。電車で周波数の境界線を通ると、一瞬だけ照明が消えて非常灯のみ点灯します。これは電車が一瞬だけ無電になるデッドセクションと呼ばれる区間です。私は旅の道中にデッドセク



石井 裕
ISHII Yutaka

プロフィール

1979年新潟県出身。東北大学工学部卒。東北大学大学院工学研究科を経て、大手エネルギー系企業に勤務。原子力発電所の設計管理業務に従事した後、フリーのライター業に転向する。企業の広報活動支援、Webメディアでの記事制作、書籍の執筆など、多岐にわたる分野で中小企業をサポートしている。会社員時代から、日本中の県境や境界線を訪ね歩くことを生涯の趣味としている。2009年『県境マニア!』（武田ランダムハウスジャパン）を出版。「マツコの知らない世界」「ゴロウ・デラックス」「シルシルミシル」「たけしのニッポンのミカタ!」「U字工事が行く!九州県境の旅」などテレビ・メディア出演多数。

堺田駅近くの中央分水嶺（写真：田仕雅淑）

ションを通り、照明が消える瞬間に遭遇して県境をまたいだ時と同様の高揚感を覚えました。

ほかにも、NTT東日本と西日本の管轄の境目や、地質学的な境目であるフォッサマグナなど、日本国内だけでも興味深い境界線が存在します。海外に目を向ければ、国境や日付変更線、赤道など世界規模の境界線への興味も尽きません。

行政的・物理的な明確な線引きだけでなく、文化や生活様式が緩やかに変化する見えない境界線に惹かれることもあります。例えば「おおきに」は大阪など関西地方の方言のイメージがあります。しかし、福井県の嶺南地方（敦賀市や小浜市など）でも使われている方言で、実は関西を越えてスッと切り替わるものではありません。

たかが境界、されど境界。旅の面白さは、観光名所やグルメだけでなく、境界線を感じることで、別世界にやってきたという実感を得られることかもしれません。